

沖高みらい探究プロジェクトによる教育実践～校長主導による生徒の地域課題解決～

鹿児島県立沖永良部高等学校 校長 室屋 洋一

1 はじめに

本校は、本土から約550km離れた沖永良部島（資料1参照）にある一島一校の高等学校である。全日制課程の普通科及び商業科を設置しており、島内に上級学校がないために事実上、島内における最高学府といえる。在籍者のほとんどを島内4つの中学校出身者が占めており、温厚で誠実な島民性に育まれた純朴で明るい生徒ばかりである。地域からは沖高（以下、沖永良部高等学校を沖高とする）と呼ばれ、島民から愛されており、本校卒業生も多く、地域から信頼され愛される学校づくりが沖高の至上命題である。

そもそも学校にとっての地域とは何であろうか。ローカルもしくはリージョナルな視点にもよるが、少なくとも本校にとっての地域とは沖永良部島といえる。一方、生徒にとっての地域とは何であろう。生徒にとっては、この島は生活の場でしかない。したがって、そこにこの島を研究の場とする認識は皆無である。それゆえ島外の研究者から見れば、魅力的に感じる島内の研究対象も単なる日常に過ぎないのである。ましてや、島の魅力にあまり気付くはずもなく、高校卒業後はほとんどが島立ちの日を迎える。「果たしてそれでいいのだろうか」と感じたのが教育実践につながる動機である。生徒自身がもっと地域の良さに気付き、再発見する体験をすれば、島に誇りを持ち、将来、帰島へのきっかけや島を離れても島づくりの根強い支援者となるのではないかと感じたからである。

そのような思いを抱くなか、1月のある日、私は県都である鹿児島市の書店で一冊の本と出会う。それが大崎海星高校魅力化プロジェクト編著『高校魅力化&島の仕事図鑑～地域とつくるこれからの高校教育～』学事出版（資料2参照）である。この一冊には私の本校や島に対する思いを解決に導くヒントが隠されていた。定員確保に苦しむ小規模校の校長主導の改革ストーリーに心打たれた。

おりしも、本校の進路指導主任（教諭）が校長室を訪れて、三菱みらい育成財団による研究助成校募集の話を持ってきた。私は二つ返事で「是非ともやりたいので力を貸してくれ」と同教諭に頼み、仕事図鑑と探究学習の二本柱を持つ「沖高みらい探究プロジェクト」が始動した瞬間であった。

2 プロジェクトの目的

沖永良部島にはハローワークが無いため、就職は専ら口コミが主流であり、小中高生が職業を知る機会に恵まれていない。それゆえ、高校生になっても職業理解が進んでおらず、帰島意欲が高い本校生であっても島内にどのような仕事があるのかを知らずに島立ちの日を迎えるのが実状であった。

そこで「職業を知る機会がないなら自分たちで作ればいい」と考えて、本プロジェクトの一つめの柱を、生徒が自ら動いて職業人インタビューを行う冊子作成学習とした。名称は地名である「エラブ（永良部）」と「選ぶ」をかけた『えらぶ仕事図鑑』に決まった。したがって、本プロジェクトの一つめの目的は、社会探究学習として図鑑の作成を通して、普段接触のない人の出会いによって職業観や勤労観を醸成するキャリア育成および地域の良さを再認識することにある。

次に、沖永良部島は先ほど世界自然遺産に認定された奄美大島・徳之島と沖縄本島に挟まれた自然豊かな地域にあり、奄美圏でも琉球圏でもない両者が融合した独特の文化圏を持つなど人々を魅了してやまない島である。そこで、本プロジェクトの二つ目の柱を、校外の学識者や有識者の助言をいただきながら、島の課題などをテーマにしたフィールドワークを行う探究型学習とした。したがって、本プロジェクトの二つめの目的は、科学探究学習として「せりよさ研究」の実践を通して、今まで知らなかつた島の姿との出会いによって島の魅力の再発見や理解を深めることにある。

そして、探究学習によるプロジェクトの成果を沖高だけのものとするのではなく、図鑑発行による配付や地域に開かれた成果報告会を行い、幅広く成果を多方面に還元して、生徒自身の自己有用感や自己肯定感を感じさせることも狙いとしたい。また、島内の小学生や中学生にも影響を与えて、連携を深めながら島全体の教育向上を図りたい。

3 プロジェクトの実際

(1) プロジェクト立ち上げ（事前準備）

3月末の三菱みらい育成財団への助成申請締め切りが残り1ヵ月と迫るなか、私が中心となって応募企画書、経費計画書、年間計画書、実施体制図（資料3参照）の申請資料を作成した。並行して、校内だけでなく校外の地域の方々にも幅広く協力支援をいただくために、町役場や地域商工会や観光協会などと連携した「地域プロジェクト担当者会」の発足に向けた連絡調整に奔走した。特に、基幹となる和泊町企画課と知名町企画振興課とは連携を密にして、最終的に、和泊町長および知名町長に協力依頼の訪問（資料4参照）を実施して、両町長から「高校生の頑張りは心から応援したいので、プロジェクト成功のために協力は惜しまない」と快諾をいただいた。

新年度に入り、助成合否を待たずして、あらためて「校内プロジェクト担当者会」を立ち上げて、校内の体制を整えた。そして、4月から普通科2年では「総合的な探究の時間」で、商業科2年では「課題研究」でプロジェクトに係るオリエンテーションを開始した。4月末に「第1回地域プロジェクト担当者会」を本校で実施して、プロジェクトの概要説明や協力依頼などを行った。

最終的に、5月の選考委員によるZOOMによる面接を受けて、助成決定したのは6月末であった。

(2) 社会探究学習『えらぶ仕事図鑑』の取組

2年生を対象に、総合的な探究の時間および課題研究を軸に、キャリア教育を踏まえた社会探究学習として『えらぶ仕事図鑑』の作成の取組を実施した。これは、生徒がグループごとに取材先を自ら選定し、島内の職業人24名（資料5参照）の方にインタビューを行った。その後、生徒自ら、記事作成・編集・校正等を行い、図鑑を発行して、島内に情報を発信する取組であった。

なお、生徒の主体性を育むために取材交渉、アポ取り、記事作成、原稿チェックなど教師が極力、手を出さない姿勢を貫いた。インタビュー当日（資料6参照）においても、教師による生徒引率はほとんど行わなかった。これは、働き方改革による教職員の負担軽減にくわえて、生徒の自主性や責任感を育む好機と捉える理由からである。ただし、無事、『えらぶ仕事図鑑』発刊にいたった経緯は、役場職員、商工会、観光協会などの地域支援者と生徒、教員等で構成する年数回開いた地域プロジェクト担当者会（資料7参照）の存在そして日々の協力無しでは語れない。特に、学校と地域の架け橋となった地域在住のコーディネーターの存在が大きい。どうしても「学校は生徒を動かせるが、地元を知らない、逆に、地域は地元を知っているが、生徒を動かせない」というジレンマを解消すべく、重要な役割をコーディネーターには担っていただいた。

また、地域在住のマンパワーも積極的に活用した。取材や編集のノウハウを教えてくれる存在として、Webライターの方を、デザインなど効果的な伝え方を気付かせてくれる存在としてデザイナーの方を外部講師として招請して、活動に加わっていただいた。このことによって、新しいことを創める時にネックとなる教職員の負担増を無くすとともに、プロの方から直接、アドバイスをいただいたことで、より充実した誌面（資料8参照）とすることができた。当然ながら、表紙デザイン（資料8参照）やタイトルなども、希望する生徒の手によるもので高校生らしい若々しい素敵の一冊となった。

私自身、プロジェクト発案者として、積極的に授業等にも参加して、日々の課題解決にあたった。生徒の声に真摯に耳を傾け、教職員の困り感を解消するために、コーディネーターと連携を取り合って活動をすすめた。特に、苦労したのはアポイントや取材ではなく、記事作成に係る編集・校正であった。取材に協力いただいた職業人の仕事にかける想いや人生といえる生きざまを丁寧に文章化するために、追取材や書き直しを繰り返した。おかげで読まれた方々から「読み応えのある生きた文章だ」といううれしい言葉も多数いただいた。

最終的に、2月末には『えらぶ仕事図鑑』を2,000部発刊することができ、この研究成果を沖高だけのものとすることなく、島内全ての中学校の全校生徒と教職員に、島内全ての小学校の5・6年生全員と教職員に配付した。また、島内関係先や各種団体などの多くの事業所に配付して、幅広く研究成果を島内外に発信した。

(3) 科学探究学習「せりよさ研究」の取組

2年生希望者を対象に、沖永良部島の古称である選んでも選ぶことのできない「せりよさ」を冠した科学探究学習の取組を実施した。これは1年次ディベート学習を基本に、新たにSDGsのグローバルな視点を加えた島の課題を生徒がテーマを設定して、本学習の位置づけ（資料9参照）を明確にした。

希望する生徒がグループを作り、自ら話し合った結果、5つのテーマを設定した。いずれも業務改善による教員の負担軽減のため指導者を教員とせず、テーマに関連する島内の外部団体とつながり、フィールドワークを行い、より学術的で実践的な探究学習となるように調整を図った。

＜5つの探究テーマと連携外部団体・連携学術機関＞

- ・方言である“しまむに”の言語研究と存続について「言葉は魂！島の魂“しまむに”を残したい」

知名町中央公民館しまむに講座、国立国語研究所准教授、東京外国语大学研究員

- ・島における赤土と環境との関係について「土壤分析及び適した農作物を取り巻く環境について」

鹿児島県沖永良部事務所、和泊町農林課、知名町農林課、名桜大学国際学群教授

- ・水産業の将来について「島のための海人でありたい」

沖永良部漁業協同組合、和泊町経済課、鹿児島大学水産学部准教授

- ・栽培されているシマ桑の成分分析と効能について「シマ桑に秘められた可能性を探る」

シマ桑生産組合、シマ桑生産農家、知名町農林課

- ・島から考えるSDGsについて「沖永良部島の環境とコミュニティから考えるSDGsについて」

未来醉庵塾、地球村研究室、東北大学名誉教授

取り組んだ研究成果を幅広く発表する場として、5グループすべて11月に県教育委員会主催の第2回県高校生探究コンテストに研究要綱を作成してエントリーした。その結果、すべてが最終選考に進むことが決定し、A0サイズのポスター作成発表の運びとなった。なお、当初は鹿児島市にて発表が予定されていたが、コロナ禍のため急遽、録画による審査となるも、充実した素晴らしいプレゼン（資料10参照）であった。結果として「言葉は魂！島の魂“しまむに”を残したい」が優秀賞の栄冠に輝いた。外部の方から研究活動を認められた大きな成果であり、生徒たちの確かな自信となつた。

(4) プロジェクト成果報告会の実施

ア 『えらぶ仕事図鑑』ポスターセッション

『えらぶ仕事図鑑』の発刊によって、研究成果を地域に発信することはできるが、どうしても発刊予定の図鑑が小学生には難しい内容ではないかという声が生徒から上がってきた。そのため、改善策として小学生向けの伝達方法のひとつに近隣の和泊町立大城小学校と知名町立下平川小学校の児童を本校に招待して、ポスターセッションを実施することとした。

準備として、当然ながら分かりやすいイラストや図表入りの手書きのA0判ポスターを作成して、工夫練習された3分間の説明を行った。そして、体育館の壁一面にポスターを貼付して24ブースの会場を設置した。なお、当日は他学年の本校生も参加し、小学生のほか、取材先や教育関係者や地域の方なども招待して一大イベントとなった。体育館中に人々が所狭しと集い、探検バック片手に高校生の真摯な説明に聞き入る小学生、ブースごとにいろいろな質疑応答が飛び交う姿（資料11参照）は、さながら企業のプレゼン会場のようであった。何よりうれしかったのは、ポスターセッションに参加の小学生が「この島にこんなに多くの仕事があるとは思いませんでした」との言葉であった。

イ 「せりよさ研究」プレゼンテーション

5つの探究テーマに基づいて、校外の外部団体とつながりフィールドワークを行った成果をまとめて発表するためにパワーポイントによるプレゼンテーションを実施した。聴衆者として、全校生徒および研究協力いただいた外部団体関係者や地域の方も参加していただき、1グループ12分間のプレゼンを行い、その後8分間の質疑応答（資料12参照）を行った。

それぞれのプレゼンテーションについては、フロアから多くの疑問や質問が出され、それに応答することで発表者である生徒も更に研究不足を感じるとともに学びを深めた。

4 プロジェクトまとめ（評価）

プロジェクトの内部評価として、『えらぶ仕事図鑑』に関する校内生徒アンケート結果によると、84%が好意的な評価をしており、「とても良い経験をした」「思っていたことと違っていた」など意見が出された。地域からの外部評価として、取材先はもとより、両町長、町教育委員会、農商工団体、県沖永良部事務所など数多くから好評をいただいた。また、学事出版から取材依頼を受けて『月刊高校教育令和3年8月号』（資料13参照）にも本校の取組が掲載された。

そして、客観的な外部評価として、三菱みらい育成財団の教育プログラム定量化アンケートによると、本研究は社会性に関わる学習環境が整っており、探究性に関わる行動に挑戦しているが、全般的に課題設定力や批判的思考力に欠けているとの指摘をいただき、今後の改善につなげたい。

なお、三菱みらい育成財団2021成果発表会アワードにおいて西日本地区研究助成32校の頂点に立つグランプリをいただいた。この受賞によって本校の「沖高みらい探究プロジェクト」が地域に根ざしたオリジナリティあふれる取組であったと過分なる評価をいただきうれしい限りである。

特に、本研究における『えらぶ仕事図鑑』の取組は、今までの中高におけるキャリア教育で一般的である職場体験学習とは違った学びである。実際に現場に出向くことに差異は無いが、職を浅く体験するのではなく、職を深く知る学びである。ましてや、取材対象者の生業とする職を他者に正しく伝えるためには、対象者の生き方に敬意を持って触れなければならない取材対応の難しさがある。そのうえ、いざ誌面に落とし込む作業は、思考力、判断力、表現力を駆使した知的な学びであるがゆえ、大変である。事実、生徒たちは幾度となく追取材や推敲を重ねて、他者と協力しながら苦労のうえ、誌面を完成させたのである。従前のキャリア教育のあり方に一石を投じる取組になると思われる。

一方、せりよさ研究の取組については、私自身も全てのグループに関わり指導・助言したが、生徒の持つポテンシャルの高さに圧巻された。教え過ぎずコーチングの姿勢を貫いた結果、労を厭わず、自ら外部団体と連絡を取りながら研究活動に取り組む姿に感動すら覚えた。

5 今後の課題

当然ながら、これらの研究実践が単年度で終わっては十分な教育効果が發揮できないのは自明の理である。幸いなことに令和4年度も「三菱みらい育成財団研究助成」継続が決定している。おかげで、今年度も、新しい2年生が先輩たちの跡を継いで活動を始めている。

今後の課題としては、生徒にもっと主体性をもたせる仕組みを構築して、課題設定力や批判的思考力などを高める工夫が必要である。具体的には『えらぶ仕事図鑑』については誌面レイアウトの原案作成段階から生徒に任せて、取材前の職業研究にも力を入れさせるべきである。また、「せりよさ研究」についても、もっと身近にある社会問題や素朴な疑問から探究シードを見つけることが必要だと感じている。やはり、体験は社会を生き抜く力を育む貴重な財産である。今後も学びを校外に求めて、生徒を信じてトライさせることの重要性を再認識した。

6 おわりに

現実的に「どうせ島だからできない」と諦めている生徒はいないだろうか。今こそ「島だからこそできる」と生徒の思考をコペルニクス的発想で変えるべき時に来ていると感じる。地域が「見えない」のではなく「視ようとしていない」のである。分かりやすく言えば、生徒の多くは地域にある魅力をただ見過ごしているし、その価値に気付いていないのである。そこで、その魅力や価値にいち早く気付き、学習に取り入れていくのは地域に根ざす学校の役割であろう。

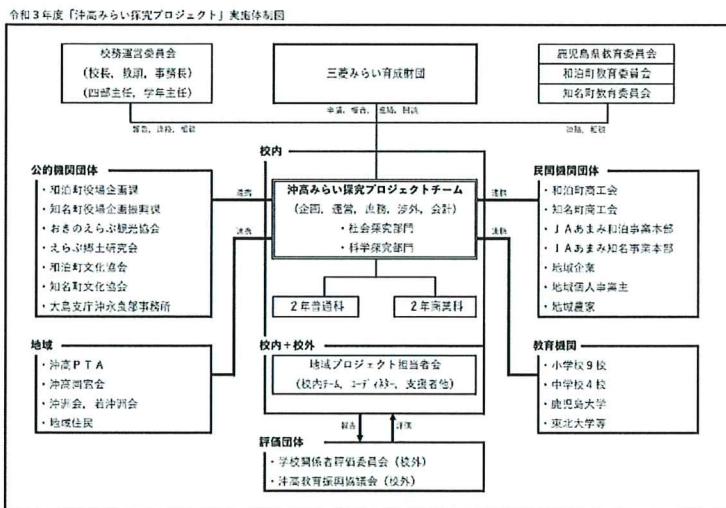
今後、生徒が変化の激しいV U C Aな時代を生き抜くためには、果敢に自ら社会に飛び込み、さまざまな体験をすることが重要である。そのため、身近な社会である地域に目を向けて、校外と連携しながら生徒を育む体制づくりは高校にとって必要不可欠である。これからも、沖高が地域から愛され信頼される高等学校であり続けるために、さらに地域との連携を深めて本校の魅力化に励んでいきたい。そして、沖永良部島の素晴らしいを再認識した卒業生たちが、やがて島を支える人財となり、未来の持続可能な島づくりに貢献してくれることを心から願ってやなまい。

添付資料（鹿児島県立沖永良部高等学校）

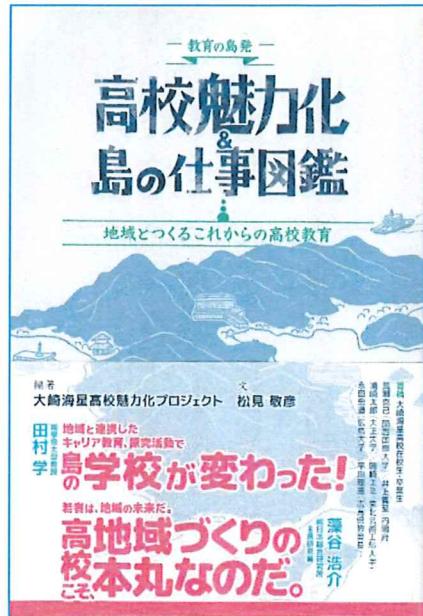
【資料 1：沖永良部島の位置】



【資料 3：プロジェクト実施体制図】



【資料 2：高校魅力化＆島の仕事図鑑】



【資料 4：町長への協力依頼】



【資料 5：職業人インタビュー先一覧】

飲食業	ケイビング(宿泊業)
農家(じゃがいも)	役場職員
美容師	マッサージ
管理栄養士	漁師
製菓職人	医療秘書
獣医師	花農家
保育士	カフェ(美容室)
グランドハンドリング	理学療法士
デザイナー	看護師
NPO法人	デイサービス
電力会社	パン職人
金融業	ホテル業
	計24人

【資料 6：インタビューの様子】



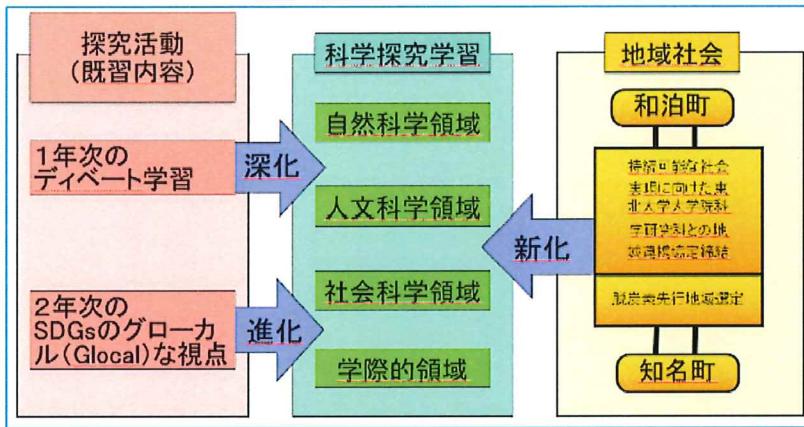
【資料7：地域プロジェクト担当者会】



【資料8：えらぶ仕事図鑑の表紙と誌面】



【資料9：科学探究学習の位置づけ】



【資料10：プレゼンテーション】



【資料11：小学生へのポスターセッション】



【資料12：プレゼンテーション質疑応答】



【資料13：月刊高校教育】

